認知言語学的観点からの接続法習得

和佐 敦子

1. はじめに

スペイン語接続法は、その形態と用法の多様性により、日本語を母語とする学習者にとって最も習得が困難であることが指摘されている (Fukushima 2005: 65)。接続法の習得を困難にしているその他の理由としては、高等学校までに学ぶ英語では、動詞の活用としての接続法に相当する示差的な形式が見られないこと (Palmer 2001: 201)、また、日本語にはスペイン語接続法に対応する形式がないように見えるため¹⁾、その概念が把握しにくいことが考えられる。

本稿の目的は、日本語を母語とする学習者が接続法の本質的意味を把握した上で、その用法を体系的に習得する方法を提案することである。

2. 問題の所在

スペイン語は直説法、接続法、命令法という3つの叙法を持つ言語である。Jespersen (1924: 313) は、叙法を「文の内容に対する話し手の心の態度を表す (they express certain attitudes of the mind of the speaker towards the content of the sentence)」とした上で、「この心の態度が動詞の形態で示される場合に限り“叙法”という言葉を使うということを銘記することが重要である (It is very important to remember that we speak of “mood” only if this attitude is shown in the form of the verb.)」としている。また、Real Academia Española (1989: 454) も、叙法について「述べられる事柄に対する話し手の態度を表す (denotan la actitud del hablante respecto a lo que se dice)」と定義している。

これまでの我が国におけるスペイン語教育では、叙法を直説法、接続法、命令法の順に導入し、接続法に関しては、使用される主節を提示することが一般的であった。代表的な初級文法の教科書である大岩・高橋 (1999)『現代スペイン語文法』においても、まず接続法現在の活用とその用法、次に命令

法と接続法過去が提示されている。そして、直説法と接続法の違いを「直説法がある事柄を客観的な事実として表現するのに対し、接続法は主観的に単に想定された観念として表現する。」(大岩・高橋 1999: 65)としている。接続法の用法については、まず名詞節の用法が主節別に提示され、次に形容詞節、副詞節、単文の願望、疑惑文の順に提示されている。我が国で発行されている多くのスペイン語教科書や文法書でもほぼ同様の説明が行われている。

ここで問題になるのは、第1に、名詞節の接続法の用法において、主節が「感情・主観的な判断」を表すときの従属節の事態は「主観的に単に想定された観念」ではなく、「客観的な事実」であるという点である。例えば、

(1) Me alegro de que *hayas* venido.

において、話し手は「君が来た」という事実に対する感情を述べており、主観的に単に想定しているのではない。このような主節が感情や主観的な判断を表す場合の接続法の用法を他の主節と同列に扱うことは、学習者に接続法とは非常に込み入った複雑なものであるという印象を与え、その習得を困難にしている。

第2の問題点は、従来の我が国におけるスペイン語教育では、接続法の各用法を個別に提示することが中心で、Gómez del Estal y Zanón (1995) で主張されているような具体的なコンテキストの中で体系的に習得する方法が提示されていないという点である。

第3の最も大きな問題点は、Real Academia Española (1989) によって定義された叙法の説明が十分に行われず、接続法が「述べられる事柄に対する話し手の態度を表す」ための動詞の屈折形態の1つであるという本質的意味の説明が行われていない、という点である。また、スペイン語接続法に関する従来の研究では、直説法は<主張 (assertion)>を表し、接続法は<非主張 (non-assertion)>を表すとされてきた (Terrell & Hooper 1974)。このような叙法対立の立場からは、<主張>を表すはずの直説法が疑問文や感嘆文などで使用されることの説明ができない。一方、直説法を無標の叙法と捉え、話し手の発話時における心的態度としてのモダリティの観点から文を分析することで、さまざまな文を包括的に捉えることができるようになる。

本稿では、話し手がどのような心的態度を表すために接続法を使用するのかという原点に立ち戻り、モダリティの観点から接続法の本質的意味を捉え、

接続法の様々な用法を体系的に習得する方法を考察する。

3. 接続法の本質的意味

前節で指摘したように、従来のスペイン語教育では、叙法とは何かの説明が十分に行われず、接続法が「述べられる事柄に対する話し手の態度を表す」ための動詞の屈折形態の1つであるという本質的意味の説明が行われていない。和佐 (2005) では、接続法の本質的意味を明らかにするために、スペイン語の文を「発話 (enunciado)」と捉える立場をとり、モダリティを「発話時における話し手の心的態度を表す意味概念」とし、叙法はモダリティを表す文法的手段の1つであるとした²⁾。では、接続法は発話において、どのようなモダリティを表すために使用されるのだろうか。本節では、Wasa (1999)、和佐 (2005) で考察した接続法の本質的意味について述べたいと思う。

一般に、次のような単文の真偽疑問文では、話し手によって提示された事態の真実性に対する判断は聞き手に委ねられ、肯定または否定の応答が求められる。

(2) ¿Ha leído el libro?

(2) では、直説法が使用され、疑問の焦点は問われる事態全体にかかる。したがって、聞き手の応答は、*sí* または *no* となる。これに対して、次のように *creer* を主動詞とする疑問文の焦点は、従属節の叙法によって変化する (Borrego, et al. 1986: 95)。

(3) a. ¿Crees que *ha* leído el libro?

b. ¿Crees que *haya* leído el libro? (Borrego, et al. 1986: 95)

Borrego, et al. (1986)によれば、(3b) のように従属節に接続法が選択されている疑問文では、「応答に対する話し手側の何らかの事前の判断 (*algún juicio previo por parte del hablante sobre la respuesta*)」が含まれ、次の疑問文に相当するという。

(4) ¿Ha leído el libro? ¿Tú qué crees?

(4)は、問いの焦点が事態全体にかかっているのではなく、「話し手が従属節の事態に対する自らの真偽判断を控え、聞き手に判断を委ねるために接続法が使用されている」ことを示している。次に、ディスコースの中で *creer* を主動詞とする疑問文の従属節に接続法が使用されている例を見てみよう。

(5) —¿Usted cree que esto ayude?

—Le aseguro que nada ayudará más, de veras de veras.

(Puig, *El beso de la mujer araña*, 203)

(6) —¿Cree usted que yo tenga algún pariente?

—Creo que no debes esperar que te encuentres algún día a algún pariente...

(Felipe, *El travieso Jimmy*, 174)

(5), (6) の応答は、いずれも *sí* または *no* ではなく、問われた従属節の事態に対する聞き手自身の判断を述べている。したがって、このような疑問文では、接続法を使用している従属節の事態が「問いの焦点」である。話し手は、問いの焦点を明示し、従属節の事態に対する自らの真偽判断を控えるために、接続法を使用していると考えられる。このような用法は、接続法が命題に対する話し手の心的態度を表すために使用されることを端的に示すものである。それゆえ、Wasa (1999), 和佐 (2005) では「真偽判断を控えるモダリティ (modalidad de reserva epistémica)」という新たなモダリティのカテゴリーを設け、接続法の本質的意味を「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」ことであるとした。

次節では、この本質的意味が接続法の各用法において、どのように顕現しているかを認知言語学的観点から検証し、その習得方法を提案する。

4. 接続法の用法

4.1 プロトタイプの用法

近年の認知言語学の進展とともに、話し手が命題を *Realis* と捉えるか *Irrealis* と捉えるかという観点からスペイン語の叙法研究が行われている (Givón 1994; Bybee et al. 1995; Haverkate 1995, 2002, etc.). Mithun (1999) は、類型論的な観点から様々な言語を分析し、どの言語においても話し手が *Realis* と *Irrealis* の区別をしており、それが小辞 (*particles*), 接語 (*clitics*), 動詞の屈折などによって表されることを指摘している。次は、Mithun による

Realis と Irrealis の定義である。

- (7) The realis portrays situations as actualized, as having occurred or actually occurring, knowable through direct perception. The irrealis portrays situations as purely within the realm of thought, knowable only through imagination. (Realis とは、事態を実現したこと、起こったこと、あるいは実際に起こりつつあることとして描写する。それは直接的な知覚を通して知り得るものである。Irrealis とは、事態を純粹に思考の領域内にあるものとして描写する、それは想像を通してのみ知り得るものである。) (Mithun 1999: 173)

(7) の定義は、Realis と Irrealis の概念が人間の知覚、思考に深く根差した、優れて認知的な概念であることを示している。この Realis/ Irrealis の観点からは、話し手が現実世界において事実であると認識した（あるいは、認識している）事態以外はすべて Irrealis ということになることに注目したい。

次に、この Realis と Irrealis の観点から「あなたがゆっくり話すこと (usted hablar despacio)」という命題を見てみよう。

(8) Usted *habla* despacio. → Realis

(9) *Hable* usted despacio. → Irrealis

(8) は、話し手が「あなたがゆっくり話す」という事態を直接的に認知した場合 (Realis) であり、直説法が使用される。一方、(9) を発話する話し手にとって「あなたがゆっくり話す」という命題は、話し手が想像する事態 (Irrealis) である。

この観点から見ると、(8) と (9) のような単文の命題・モダリティ構造は次のようになっていると考えられる。

- (10)
M ₁ (発話・伝達)	M ₂ (命題めあて)	P
- (M: モダリティ, P: 命題)

(10) において、M はモダリティ、P は命題を表す（ちなみに、これは意味

概念の構造を表したもので、言語形式の並び方を示すものではない)。 M_1 は文を発話・伝達する際のモダリティを表し、 M_2 は話し手が命題に対して表すモダリティを表す。

(10) の命題・モダリティ構造を (8) に当てはめると、次のようになる。

(8') Usted habla despacio.

(8') において、話し手は「あなたがゆっくり話す」という事態を認知し、それを<平叙>で発話・伝達するモダリティを有する。そして、[Usted hablar despacio]という命題を Realis であると捉え、直説法によって「命題が真であると判断する」というモダリティを表すと考えられる。

次に、(9)の命題・モダリティ構造は次のようになる。

(9') Hable usted despacio.

(9') では、話し手は<命令>の発話・伝達のモダリティを有し、[usted hablar despacio] という命題に対しては、Irrealis であるため真偽判断ができないと捉え、屈折語尾を接続法に変えることによって「命題に対する真偽判断を控える」というモダリティを表すと考えられる。

<願望>や<希望>の発話・伝達のモダリティを表す文においても、同様のことが言える。

(10) ¡Muera Esquilache!

(Buero Vallejo, *Un soñador para un pueblo*, 134)

(11) Ojalá nos veamos en Buenos Aires.

(Puig, *Cae la noche tropical*, 174)

(12) Quiero que me cuente el sueño de anoche.

(Puig, *Maldición eterna*, 59)

(10) の [morir Esquilache], (11) の [vernós en Buenos Aires], (12) の

[(usted) contarme el sueño de anoche] という命題は、いずれも話し手が想像する *Irrealis* の事態であり、話し手は (9) と同様、真偽判断ができないと捉え、「命題に対する真偽判断を控えるモダリティ」を表すために接続法を使用していると考えられる。

また、遂行動詞が主節になる当為判断文でも同様である。このような当為判断文の主節の遂行動詞としては、＜命令＞を表す *ordenar, mandar*, ＜要求＞の *exigir, demandar*, ＜勧告＞の *aconsejar*, ＜依頼＞の *pedir*, ＜許可＞の *permitir*, ＜禁止＞の *prohibir* などが挙げられる。Egea (1979) は、遂行動詞 *ordenar* が主節になる文の従属節において、真偽判断の副詞 *probablemente* が共起できないことを指摘している。

- (13) *Te ordeno que **probablemente** cenés en algún restaurante de las afueras. (Egea 1979: 261)

(13) は、当為判断文の従属節は話し手が想像する *Irrealis* の事態であるため、真偽判断ができない命題であることを示している。

以上に考察したのは、接続法のみが使用される文であったが、形容詞節では、*Realis* と *Irrealis* の区別によって直説法と接続法の叙法交替が行われる。

- (14) Busco una casa que *tiene* una piscina. → *Realis*
(15) Busco una casa que *tenga* una piscina. → *Irrealis*

(14) の *una casa* は話し手が前に行ったことのある家で、そのプールのある家が実在することを知っている。この場合の *una casa* は話し手がその存在を認知した *Realis* の家であり、直説法が使用される。一方、(15) の発話は、話し手が住む家を探していて、プールのある家が実際にあるかどうかかわからず想像している文脈が考えられる。この場合の *una casa* は話し手がその存在を認知していない想像上の *Irrealis* の家であるため、接続法が使用される。

また、時や譲歩の副詞節などでも、*Realis* と *Irrealis* の区別によって叙法交替が見られる。

- (16) Se durmió cuando *pusieron* la radio. → *Realis*
(17) Ven cuando *termines* de estudiar. → *Irrealis*

(Borrego, et al. 1986: 138)

(18) Aunque ahora *está* lloviendo, saldré a pasear. → Realis

(19) Aunque *llueva* mañana, saldré a pasear. → Irrealis (三好 2006: 32)

以上の事実、接続法の本質的意味が「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」ことであることを立証するものであり、類型論的観点からも、Irrealis の事態に対して接続法を使用するというのが、接続法のプロトタイプの用法であると言えよう。また、このような用法は、特にコンテキストを提示しなくても、学習者にとって理解しやすいものである。したがって、接続法の導入に際しては、次のことを提案したい。

(20) a. 最初に、単文の<命令>や<願望>を表す文を提示し、Irrealis の概念³⁾と「Irrealis であるがゆえに、動詞の活用語尾によって、事態に対する真偽判断を控える気持ちを表す」という接続法の本質的意味を説明する。

b. 次に、*querer* を主動詞とする文、遂行動詞を主節とする当為判断文、形容詞節、副詞節の順に提示し、Irrealis の事態に使用するのが接続法の典型的用法であることを示す。

4.2. 非プロトタイプの用法

4.2.1. 感情・評価を表す文

接続法を習得する上で最も難解な点は、Irrealis の概念では説明できない接続法の用法があることである。代表的な用法は、主節が従属節に対する感情や評価を表す場合である。

(21) Siento que *haya* fallecido.

(22) Es una lástima (bueno, malo, interesante, etc.) que María no
haya podido terminar a tiempo. (Terrell & Hooper 1974: 487)

(21), (22)のような感情や評価を表す文では、話し手が Realis であると捉えた従属節の事態になぜ接続法が使用されるのだろうか。

Borrego et al. (1986) は、情報伝達という観点から、主節が感情・評価を表す文における叙法選択について、次のような興味深い例を挙げている。

(23) Me preocupa que la Bolsa *haya* bajado.

(24) —¿Qué pasa? ¿Te preocupa algo?

—Sí, me preocupa que la Bolsa *ha* bajado. (Borrego, et al. 1986: 35)

(24) では、“me preocupa que...”を発話する話し手は、聞き手が何について心配しているか知らないため、「株が下がった」という事態を知らせる必要があると考えて直説法を使用しているという。Borrego et al. (1986: 35) によれば、(23) では「株が下がった」という既知の事態に対する評価として感情を述べるだけであるのに対し、(24) では「株が下がった」という事態に対する評価をすると同時に、従属節の事態を情報として聞き手に伝えるために直説法が使われるという。これらの事実を考慮して、(23), (24) の情報構造を表すと次のようになる。

(23') Me preocupa que la Bolsa *haya* bajado .

[背景化]

(24') Me preocupa que la Bolsa *ha* bajado .

[前景化]

(23') のように従属節に接続法が使用される場合は、主節が主な情報であり、従属節は背景化 (backgrounding) される。一方、従属節を「前景化 (foregrounding)」する必要があるときには、(24') のように直説法が使用される。従来の認知言語学的観点からの研究において、この事実はすでに指摘されている (Haverkate 2002) が、なぜ背景化のために接続法が使用されるのかということが明らかにされていない。

(23) のような Realis の事態に対して使用される接続法の用法は、発話文脈において現れるもので、話し手の情報伝達に関する心的態度が関与している。ここでは、話し手の情報伝達の主眼は主節にあり、従属節にはない。従属節の命題内容は、話し手にとっては既に真であるということが確認済みであり、聞き手にとっても既知の情報である。そのため、話し手は、当該の命題を真偽判断の対象とすることを表明しないために接続法を使用していると考えられる。本来 Irrealis の事態に対して使用されるはずの接続法がこのような Realis の事態に対しても使用されるのは、その本質的意味が「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」ことにある所以である。したがって、

感情・評価を表す文の従属節における接続法の使用は、談話領域において本来の用法が拡張されたものであり、プロトタイプから逸脱した非プロトタイプの用法であると言える。

このような感情・評価を表す文における接続法の導入に際しては、情報の伝達の価値という観点が必要で、特にコンテキストを提示することが必要である。Gómez del Estal y Zanón (1995) は、コンテキストを用いた効果的な習得方法を提示している。まず、テレビの討論番組において、司会者は参加者の女性 5 人に次のような電話によるアンケート調査の結果を聞かせる。

- (25) El 40% de los maridos no hace ninguna tarea doméstica. Del 60 % restante, sólo un 8% trabaja en casa igual o más que la mujer. El otro 52% realiza pequeñas tareas como recoger la mesa o tender la ropa, pero nunca planchar o preparar la comida.

(Gómez del Estal y Zanón 1995: 2)

次に、司会者の“Vamos a ver, ¿qué les parecen estas cifras?”という問いに対して、5 人の女性参加者は、それぞれ次のような返答をしている。

- (26) a. Bueno, yo creo que son bastante reales.
b. Pues pienso que son muy exageradas. Las cosas han cambiado.
c. A mí también me parece que las cifras son exageradas.
d. Pues es raro que las mayoría no *haga* casi nada.
e. A mí me parece increíble que el 40% no *ayude* a su mujer.

(Gómez del Estal y Zanón 1995: 3)

Gómez del Estal y Zanón (1995) は、(26a) ~ (26e) において、主節と従属節の存在を学習者に意識させ、主節を取り除くことができれば、従属節は直説法、取り除くことができれば接続法というルールを身につけさせる方法を取っている。この方法は、学習者に従属節に情動的価値があるか否かということを考えさせる上で、非常に有効である。例えば、(26a), (26b), (26c) の主動詞は *creer*, *pensar*, *parecer* であるが、従属節の内容は聞き手にとって新情報であり、主節を取り除いても情動的価値は変わらない。一方、(26d), (26e) の従属節は (25) で聞いたことを繰り返す内容で情動的な価値はなく、主

節において従属節の事態に対する感情・評価を表明することを目的とする文であり、主節を取り除くことはできない。この方法は、情報伝達という観点からコンテキストの中で接続法の使用を捉えることができるという点で有効である。しかし、接続法の本質的意味は説明されていないため、「主節を取り除くことができなければ接続法」というルールを機械的に習得できるにすぎないことが欠点である。4.1 節で述べたプロトタイプの用法を最初に導入し、接続法の本質的意味を説明した上で非プロトタイプの用法としてこの方法を導入すれば、より効果的になるとと思われる。

他方、(26) で注目すべき点は、*creer*, *pensar*, *parecer* などの認識動詞を主節とする肯定文の従属節の命題は、話し手が知覚によって真であると捉えた事態 (Realis) ではないということである。このような動詞を主節とする文の従属節では、話し手が命題を真であると判断するという心的態度、すなわち「真偽判断のモダリティ (modalidad epistémica)」を聞き手に伝達するために直説法が使用される。一方、認識動詞を主節とする文が否定文になると、一般に接続法が使用される。

- (27) ●Señores, el racismo desaparecerá cuando reduzcamos la emigración.

○ Yo no creo que la emigración sea problema.

(Gómez del Estal y Zanón 1995: 7)

(27) では、話し手が [la emigración ser problema] という命題の真実性についての判断に言及しないために接続法が使用されている。したがって、この用法も、「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」という接続法の本質的意味によって説明できる。これに対して、*creer* の主語が話し手以外の時は、直説法も接続法も使用される。

- (28) a. Juan no cree que haya un peligro inminente.

b. Juan no cree que hay un peligro inminente.

(Borrego, et al. 1986: 87)

(28a) のように接続法が使用される場合について、Borrego, et al. (1986) は、「話し手が従属節の命題の真実性について言及しないのは、話し手が従属節の

命題を真であるかどうか知らないか、聞き手がすでにそのことを知っているか、または真であると表明することが必要であると考えないからである (el hablante no se manifiesta sobre la verdad de lo que sigue, bien porque no sabe si es o no verdad, bien porque su interlocutor ya lo sabe, bien porque no considere necesario manifestarse)」(Borrego, et al. 1986: 87) と述べている。一方、(28b) の従属節で直説法が使用されるのは、「話し手が差し迫った危険があるということを聞き手に分からせる (el hablante da a entender al oyente que hay peligro inminente)」(Borrego, et al. 1986: 87) 場合であるという。直説法は、ここにおいても話し手が命題を真であると判断するという心的態度を伝達するために使用されている。

直説法は、平叙文のみならず、疑問文、感嘆文にも使用される無標の叙法であるが、認識動詞を主節とする肯定文の従属節では、話し手の命題を真であると判断する心的態度を表すために直説法が使用されることを銘記しておきたい。

以上の考察をもとに、感情・評価を表す文の接続法の導入に際して、次のことを提案する。

- (29) まず、コンテキストの中で情報の伝達という観点から、*creer, pensar, parecer*などを主動詞とする文と感情・評価を表す文を学習者に比較させる。次に、接続法の本質的意味を説明した上で、従属節の内容が聞き手にとって既知である場合には、あえて伝える必要はないという話し手の気持ちから、非典型用法として、Realisの事態にも接続法を使用するということを説明する。

4.2.2 *el hecho de que* 節と *aunque* 節

Realis と捉えられる事態に接続法が使用される例は、*el hecho de que* 節にも見られる。Borrego et al. (1986) は、*el hecho de que* 節における叙法選択について、非常に興味深い指摘をしている。

- (30) El hecho de que nadie nos escriba me entristece.

- (31) Márchate si quieres. El hecho de que te marches no me va a hacer cambiar de opinión. (Borrego et al. 1986: 107)

Borrego et al. (1986) によれば、(30) は聞き手も話し手も「誰も私達に手紙を書いてくれない」ことを知っている場合であり、(31) は「聞き手が行くかどうかわからない」場合であるという。この例から、*el hecho de que* 節は、*Realis* の事態だけでなく、*Irrealis* の事態にも使用されることが分かる。また、(30) のように *Realis* の事態でも、(31) のように *Irrealis* の事態でも、接続法は従属節について「伝達するためでない (*no para informar*)」とき使用されるという。これに対して、*el hecho de que* 節に直説法が使用される場合がある。

(32) Conviene destacar el hecho de que algunos países no son revolucionarios. (Borrego et al. 1986: 108)

(32) は、*destacar* という動詞の意味からも、「伝達するため (*para informar*)」に直説法が使用されていることは明らかである。これは、4.2.1 節で見た感情・評価を表す文における叙法選択の原理と同じであることに注目したい。

一方、譲歩節では、4.1 節で述べたように、基本的には *Realis* の事態には直説法、*Irrealis* の場合には接続法が使用されるが、*Realis* の事態にも接続法が使用される場合がある。

(33) *Aunque yo sea español, no me gustan los toros.* (三好 2006: 33)

(33) の従属節において、「私がスペイン人であること」は当然ながら *Realis* の事態である。(33) のような譲歩節では、話し手の伝達の中心は主節の「闘牛が好きではない」にあり、この点において、「私がスペイン人であること」は認めたくないという気持ちを接続法によって表していると考えられる。一方、日本語では「私はスペイン人であることはあるが」、「私はスペイン人ではあるが」という言語形式を使用して、その気持ちが表される。

このような *el hecho de que* 節、*aunque* 節の *Realis* の事態に対する接続法の用法は、初級文法を終えた後に導入すべき高度な用法である。しかし、本節における考察から、感情・評価を表す文と同様、発話文脈に依存した非プロトタイプ用法として捉えられることが明らかである。導入の際には、感情・評価を表す文と同様、プロトタイプから逸脱した非プロトタイプの用法としてコンテキストを提示することを提案したい。

本節における考察から、接続法が使用される命題には、①話し手の想像に

よるものであるため、真偽判断ができない命題、②話し手が情報として伝えることを主眼としない命題、③真であることがわかっている、それを認めたくない命題、という3つのタイプがあることが明らかになった。初級文法では、①をプロトタイプの用法、②を非プロトタイプの用法として導入することで、学習者は体系的に接続法を習得することができるものと考えられる。

5. おわりに

本稿では、認知言語学的概念である *Irrealis* の事態に対する接続法の用法がプロトタイプの用法であり、*Realis* の事態に使用されるのは、情報伝達に関わる非プロトタイプの用法であるとした。また、このような拡張が可能になるのは、接続法の本質的意味が「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」ことによることを主張した。本稿で提案した日本語を母語とする学習者が接続法の用法を体系的に習得する方法は、次の通りである。

- 1) 最初に、単文の〈命令〉や〈願望〉を表す文を提示し、*Irrealis* の概念と「*Irrealis* であるがゆえに、動詞の活用語尾によって事態に対する真偽判断を控える気持ちを表す」という接続法の本質的意味を説明する。次に、*querer* を主動詞とする文、遂行動詞を主節とする当為判断文、形容詞節、副詞節の順に提示し、*Irrealis* の事態に使用するのが接続法の典型的用法であることを示す。
- 2) 感情・評価を表す文における接続法の導入に際しては、まず、コンテキストの中で情報の伝達という観点から、*creer, pensar, parecer* などを主動詞とする文と感情・評価を表す文を学習者に比較させる。次に、接続法の本質的意味を説明した上で、従属節の内容が聞き手にとって既知である場合には、あえて伝達する必要はないという話し手の気持ちから、非典型的の用法として、*Realis* の事態にも接続法を使用するということを説明する。

註

* 本稿は日本イスペインヤ学会第52回大会(2006年10月22日 同志社大学)において発表した内容に加筆修正したものです。当日、貴重なご教示をくださった先生方に厚く御礼申し上げます。また、本稿の改訂に際し、大変有益なご助言をいただいた査読の先生方に深く感謝申し上げます。

- 1) 日本語の古典語における「未然形+ム」とスペイン語接続法が対応する例については、和佐(2005)の第5章を参照されたい。

- 2) 英語においても、これとはほぼ同様の定義が行われている。澤田 (2007: 118) は、「『モダリティ』が事柄のあり方（その事柄がどのようにあるのか、あるべきなのか）に関する意味的なカテゴリーであるのに対し、『法』は事柄のあり方（その事柄が現実的か、仮想的か、あるいは希求的か）を表すための文法的なカテゴリー（＝動詞の屈折変化）であると考えられる。すなわち、法はモダリティを表すための主要な文法的手段の1つである」としている。
- 3) 筆者は学習者に (7) の Mithun の定義を示し、Realis, Irrealis という用語を使用しているが、比較的容易に受け入れられるようである。しかし、学習者によってはこの用語を使うことが難しい場合もあると思われる。その場合は、この認知的概念を説明した上で、Realis には「現実」、Irrealis には「非現実」という用語を使うことを提案したい。

参考文献

- Borrego, J., J. G. Asencio y E. Prieto. *El subjuntivo. Valores y usos*. Madrid: SGEL.1986.
- Bybee, Joan & Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*. Amsterdam: John Benjamins. 1995.
- Egea, Esteban Rafael. *Los adverbios terminados en -mente en el español contemporáneo*. Bogotá: Publicaciones del Instituto Caro y Cuervo. 1979.
- Fukushima, Noritaka. 2005. Cómo enseñar el subjuntivo?. 『神戸市外国語大学外国語学研究 65 より良いスペイン語教育をめざして』神戸市外国語大学外国語学研究所. pp. 65-88.
- Givón, Talmy. 1994. Irrealis and the Subjunctive. *Studies in Language* 18-2. pp. 265-337.
- Gómez del Estal Villarino, Mario y Javier Zanón Gómez. 1996. *G de gramática*. Barcelona: Difusión.
- Haverkate, Henk. 1995. Spanish mood and the expression of cognitive and evaluative meaning. *Verba* 22. pp. 11-29.
- Haverkate, Henk. *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Spanish Mood*. Amsterdam: John Benjamins. 2002.
- Mithun, Marianne. *The Languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press. 1999.
- 三好準之助. 『スペイン文法中級コース 改訂版』東京.白水社. 2006.
- 大岩勉・高橋寛二. 『現代スペイン語文法』東京.白水社. 1999.
- Palmer, Frank R. *Mood and Modality* (2nd Edition). Cambridge: Cambridge University Press. 2001.
- Real Academia Española. *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa-Calpe. 1989.

澤田治美. 『モダリティ』 東京. 開拓社. 2007.

Terrell, Tracy & Joan Hooper. 1974. A Semantically Based Analysis of Mood in Spanish. *Hispania* 57. pp.484-494.

Wasa, Atsuko. 1999. El subjuntivo y la modalidad. *Hispania* 82-1. pp. 121-127.

和佐敦子. 『スペイン語と日本語のモダリティ—叙法とモダリティの接点—』 東京. くろしお出版. 2005.

Yespersen, Otto. *The Philosophy of Grammar*. London: Allen and Unwin. 1924.

用例出典

Buero Vallejo, Antonio, *Un soñador para un pueblo*. Warminster: Aris & Phillips. 1993.

Felipe, Carlos. *El travieso Jimmy. Teatro cubano contemporáneo*. Madrid: Aguilar. 1959.

Puig, Manuel. *El beso de la mujer araña*. Barcelona: Seix Barral. 1976.

Puig, Manuel. *Maldición eterna*. Barcelona: Seix Barral. 1980.

Puig, Manuel. *Cae la noche tropical*. Barcelona: Seix Barral. 1988.

Aprendizaje del subjuntivo desde el punto de vista cognitivo

WASA Atsuko

El objetivo de este estudio es presentar a los hablantes nativos de japonés algunas pautas para enseñar el subjuntivo desde el punto de vista de los conceptos cognitivos. Sugerimos lo siguiente:

1) Primero, señalar oraciones simples que expresan orden y deseo, explicando que el subjuntivo es la desinencia del verbo que se usa prototípicamente para la proposición que el hablante toma como *Irrealis* y que su significado esencial es expresar *la modalidad de reserva epistémica* acerca de la proposición. A continuación, presentar los siguientes usos de subjuntivo como prototípicos en el orden siguiente: oraciones compuestas que expresan la modalidad deóntica, oraciones adjetivas, y oraciones adverbiales.

2) Indicar que el uso del subjuntivo para *Realis* en las cláusulas que expresan sentimiento y evaluación es el no prototípico. En la enseñanza de este uso es necesario explicar a los estudiantes, a través del contexto en forma de diálogos o situaciones concretas, que se elige el subjuntivo de acuerdo con los factores comunicativos y que se permite esta expansión del uso porque el significado esencial del subjuntivo es expresar *la modalidad de reserva epistémica*.